

## 9.6 ビバ 会津鉄道！

昨日、NHK テレビの「ふるさと発」で、会津鉄道の新人運転手の方のドキュメンタリーを見ました。

地元の人たちの大切な足として頑張っている地方鉄道の新人運転手の方が、半年ほどの間に、様々な経験を通して、沢山の方々の生活と命を預かっている自分の仕事の大切さを身をもって理解していくものでしたが、春に見た中井貴一さん主演の「RAILWAYS」とどこか共通するものを感じて、こういう鉄道にいつまでも頑張ってもらいたいと思いました。

実は、私、今年7月、南会津に出かけた時に、会津鉄道の方のご好意を受けたことがありました。

その日は、午前中、湯野上温泉駅と大内宿の間をバス（猿遊号）で往復したのですが、大内宿で蕎麦の昼食を我慢して、会津田島で昼食の弁当を手に入れて、車中で食べながら浅草に戻れば、夕食前には自宅に着けるという予定だったのです。

湯野上温泉で乗車した便は、会津田島止まり。4分間の間をおいて、浅草行き快速に連絡していました。4分あれば、改札口のすぐ前にある売店で、知る人ぞ知る「南山のたび」弁当が手に入ります。

ところがです。ちょっとしたトラブルで湯野上温泉駅3分遅れの発車、このままでは、いかに脱兎（今や「ん」と肉が付いて脱豚）のごとく駆けても、弁当を買えば連絡便には間に合いそうもありません。

車内で、切符拝見に来た車掌さんに、田島着の時間は短縮される可能性はありませんかと聞いたところ、申し訳ありません、やはり3~4分遅れになりますが、連絡便は待っていてもいいことになっています、とのこと。

そうですかと、ため息をつく私に、何かあるのですかと車掌さん。

実は、くだらないことですが、田島駅の「南山のたび弁当」を買いたいと思っていたので、と私。

そうですか、それは申し訳ありませんと車掌さん。

そのあと5分ほどして、さっきの車掌さんがニコニコしながら私のところにやってきました。

車掌さん曰く。田島の駅に聞いてみましたらね、あのお弁当人気があって、食べてもらえるならと言うことで、うちの駅員が買って到着ホームに持ってくると言っていますが、どうされますか？

もちろん、一も二もなくお願いしました。

会津田島駅での連絡時間は、1分。ホームの端で待っていただいた駅員さんから無事お弁当を受け取り、ヨタヨタと走ることもなく、浅草行きに乗ることができました。

おかげで、帰りの列車の中で、ルンルン気分でした。車掌さんの気持ちも合わさって、大変美味しい気がしました。

地方鉄道に乗る旅をしていると、こうした車掌さんや駅員さんの姿や行為に、心温まる思いをすることがあります。

それが自分に直接関係ない場合でも、その方の仕事に対する思いが感じられて、その旅全てが、忘れられない良い思い出になります。

写真は、そのときの「南山のたび」弁当です。二段弁当で、ご飯はなんと松茸ご飯です。お代は1000円。是非、機会があれば、食べてみてください。



涼しくなったら、また会津鉄道に乗って会津若松まで行こうと思っている私です。

### 10.3 カフェのテラス席

ご承知の通り、パリやウィーンなどの都市にはカフェテラスが多く見られるのですが、今回訪れたプラハの町にも、テラス席がある喫茶店が沢山あります。

朝の9時過ぎ頃には、店員の方が歩道にテーブルと椅子、それに大きなテラスパラソルを広げて準備をし、11時頃にもなると、だんだん人が増えて、お茶や珈琲だけでなく、昼間からビールを傾けながら、ワイワイ楽しそうに喋っているのを見たことがある方は多いと思います。



私は、言葉がわからないものの、このテラス席に座ってお茶や珈琲を飲みながら行き交う人たちをぼーっと眺めているのが好きです。

今回のプラハの旅でも、テラス席で一人で珈琲を飲んでいましたと、隣のご夫婦連れが声をかけてこられました。

拙い言葉で30分ほど会話をしたのですが、ご夫婦は、ストックホルムからプラハに休暇を楽しみに来たそうで、ご主人は、朝から女房に連れ回されて疲れたよと言って、ウィンクをしたのを、奥様に見咎められて、小さくなっていました。どこの国も女性の方が強いようです。

ストックホルムからは2時間弱ほどでプラハに来れるのだと言っていました。ヨーロッパは案外狭いんですね。

ところで、ご夫妻がストックホルムから来られたことをお聞きする前に、ヨーロッパの町で一番好きなのはどこかと聞かれました。

それはなんと言ってもパリでしょう、と答えますと、すこしだけ首をひねっていましたが、二番目は？

ウィーンでしょうか。

三番目は？

ここプラハです。

彼は、ちょっと悲しそうな顔をして、  
ストックホルムに行ったことはありますか？

いえ、でも美しい町だと聞いています。

すると、彼はパッと笑顔で、本当に良い町です、きっと一度来られると、あなたの順番は変わると思います。

ここで、私は、このご夫婦がストックホルムから来られたのではないかと思い当たりました。仕方のないことですが、鈍い対応でした。

次は、是非、行ってみたいと言いますと、ご夫婦ともに大変嬉しそうな顔をされていました。

ご夫婦がビールを飲み終えて別れるときです。

来られるのを待ってますよ。

ええ、是非。

良いご旅行を。

ありがとう。

たったこれだけのことですが、私がテラス席の喫茶店が好きなのは、こういう出会いと会話が自然にできるからかもしれません。

ただ、私が、どこかの国の街中のテラスで、誰かと話をしていて、東京は本当に良い町です、是非来て下さいと言えるだろうかと思うと、ちょっとだけ落ち込んでしまいそうです。

## 10.4 ヨーロッパの中庭空間

ヨーロッパを旅行しているの私の一番の楽しみは、建物の佇まいと街並みの美しさを見ることです。

多くの国の旧市街の建物は、大体が5階建て程度に屋根裏部屋がついているものを見かけることが多いようです。

建物には何か所かのアーチ型をした出入り口があって、夜は鉄格子に鍵がかけられ、住民だけが出入りできることになっています。

日本の旅行者の方で、そのアーチをくぐって中を見た人は、そう多くはないと思いますが、内部は、思いもかけないような広いスペースになっていることが多く、その中では、外の騒音がウソのような静けさに包まれた、緑豊かな空間が存在します。

今回は、ウィーンの集合住宅の建物配置を示した図と中庭の様子を写真にとってきました。

下の写真の図は、建物の入り口につけられていた配置図です。中庭の構造がよくわかると思います。



次の写真は、この建物の中庭の様子です。子供が遊ぶ施設などがありましたし、美しい草花が植えられています。大変手入れが行き届いていて綺麗でした。



中庭に当たる部分は、建物に住んでいる方々の共同スペースです。一般の方々が利用できる公的な空間ではなく、建物の住民の私有空間でもない、半公共空間とでも言うのでしょうか。



日本の市街地には、今では、このような空間が殆どなくなってしまったような気がします。マンションの中には、共有スペースがほんの付け足しのように少しある場合が見られますが、全く比べようもありません。

この差は、みんなで気持ちよく住み、暮らすということの大切な意味を理解しているかどうかの差ではないかと思われまます。

今回の旅行でも、朝の散歩の途中、住民の方にことわって、いくつかの中庭に入らせていただきました。

きちんとした格好をしていると滅多に断られることはありません。

むしろ、

私たちの中庭は綺麗でしょう

この犬は、温和しくて、みんなの人気者なんです

といったことなどを話しかけられることが多いです。

日本の町の中に、外側からは覗えないこのような共同空間を持てるようになるには、どれくらいの時間がかかるのでしょうか。

単独の高層マンションが次々と建てられ、住民同士は話もしない、そういった寂しい生活をしている日本人が、少しだけ悲しくなります。

## 10.15 明治の鉄道、ちょっとした悲劇

先日、ちょっとした必要があつて、廃止法令調べをしていましたら、探している法令のすぐ後に、鉄道略則（明治5年5月4日太政官布告第146号）というのを発見しました。

ご承知の通り、我が国で初めて鉄道が運行されたのは、新橋と横浜の間。  
明治5年9月12日（旧暦）に開業式が行われていますので、それに先立ち、作成されたのですね。

ところが、早速、家に帰って、昔読んだ「明治鉄道物語」を見てみると、不思議なことに我が国最初の鉄道は、明治5年の5月7日から、既に品川-横浜間で開業していて、晴れの開業式のみが、9月12日に天皇陛下ご臨席のもとに行われたようです。

昔は結構おおらかだったのですねえ。

ところで、明治天皇が、開業式で鉄道に乗車されたのは、二度目の乗車なんですね。  
開業式の2ヶ月前の7月12日、風波激しく、品川に着く予定の御乗軍艦が、波の静かな横浜港に回ることを余儀なくされ、横浜で下船後、横浜発18時8分、品川着19時15分の臨時お召列車で、東京にお帰りになっておられます。

これ、鉄道ができていなかったら、どうしたのでしょうかね。  
馬車で真夜中に皇居着だったのかなあ。

9月13日からは、新橋-横浜間（途中5駅）が営業開始。始発8時、最終18時で、9往復。  
所要時間は53分。  
結構早いですねえ。  
ちなみに今は、新橋-桜木町は、32分～38分（この間4～6駅）。

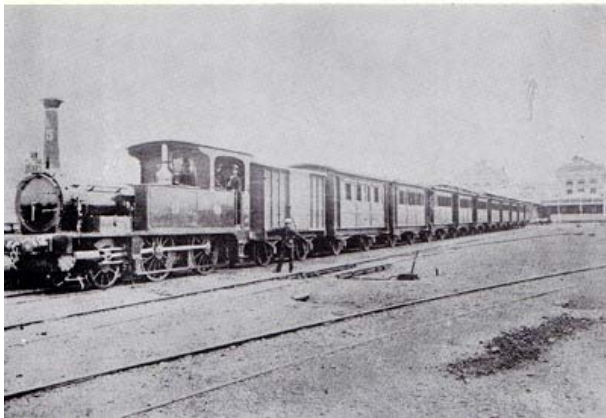
まあ、運賃はだいぶ違いますけど。  
当時の運賃は、新橋-横浜間、下等37.5銭、中等75銭、上等1円12.5銭。  
今は450円。  
あ、そうそう、犬は人間様の半額だったようですよ。

ところで、このとき、新橋-横浜間を走った汽車は、何両編成だったと思います？

- ① 客車2両
- ② 3両
- ③ 5両
- ④ 10両



正解は、④。写真の通りです。



意外だったでしょう。

ところでね、鉄道略則第 1 条の規定を見ますと

「何人ニ不限 鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者ハ 先賃金ヲ拂ヒ 手形ヲ受取ルヘシ 然ラサレハ 決テ 列車ニ乗ル可ラス」

この時以来なんですね。切符を先を買って、改札を受けて列車に乗る方式が日本で決まったのは。

鉄道略則をみると、もう既に、禁煙車両、女性車両の規定が見られます。進んでいたのですね（ホントはイギリスの規則をそのまま訳しただけ？）。

#### 第七條 吸煙並婦人部屋男子出入禁止ノ事

何人ニ限ラス 「ステーション」構内 吸煙ヲ禁セシ場所並ニ吸煙ヲ禁セシ車内ニテ吸煙スルコトヲ許サス 且婦人ノ爲ニ設アル車及部屋等ニ 男子妄リニ立入ルヲ許サス 若右等ノ禁ヲ犯シ 掛リノ者ノ戒メヲ用ヒサル者ハ 車外並鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

もちろん、酔っぱらいや「不良の行状」をした者も放り出されることになっています。

#### 第八條 醉人及不行狀人扱方ノ事

何人ニ不限 總シテ列車乗組中又ハ「ステーション」並鐵道構内ニテ 醉ニ乗シ妄狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀ヲ爲ス者ハ 鐵道掛ノ者ヨリ 車外及鐵道構外へ直ニ退去セシムヘシ

この第 8 条に関して、悲劇に見舞われた乗客のことが「明治鉄道物語」に載っていますので、そのまま、転写しておきます。

「府下\*\*新吉原江戸町\*\*番地 荒物渡世 増沢\*\*なる者、  
商用にて横浜に到らんと新橋より午後 3 時の汽車に乗りしが、  
乗車前より厠へ至らんと思へる内、



発車の期来たるに付き、そのまま乗込たりしが、  
いよいよ便気堪へ難く、既に其場へ漏すべき体なるに付き、  
止むを得ず乗車の窓より小用致せし処、鉄道寮官員に咎められ、  
遂に東京裁判所へ送致せられしが、則左の通り御処分ありたり。」

御処分は、罰金 10 円。

今のお金に直すと、30～40 万円ですね。

カワイソー。

## 10.19 北帰行

♪ 窓は夜露に濡れて / 都すでに遠のく / 北へ帰る旅人ひとり / 涙流れてやまず

♪ 夢はむなしく消えて / 今日も闇をさすろう / 遠き想いはかなき希望 (のぞみ) / 恩愛我を去りぬ

♪ 今は黙して行かん / なにをまた語るべき / さらば祖国愛しき人よ / 明日はい  
ずこの町か

これは、有名な「北帰行」の歌詞ですが、これが、旧制旅順高等学校の寮歌だということを知っている方はそう多くはありません。

ただ、一番の歌詞こそ同じなのですが、二番以下はかなり違って、寮歌の方は、次のようになっています。

♪ 富も名誉も恋も / 遠きあくがれの日ぞ / 淡きのぞみはかなき心 / 恩愛我を去  
りぬ

♪ 今は黙して行かむ / 何をまた語るべき / さらば祖国わがふるさとよ / 明日は  
異郷の旅路

この歌詞からわかりますように、よく読むと、この二つの歌は、よく似ているようですが、歌われている内容は相当違いますね。

特に、小林旭ファンの方には大変申し訳ないのですが、北帰行の方は、恋と野望に破れた流れ者のチンピラ？が、北（東北・北海道）に都落ちしていく歌のようなのに対して、寮歌の方は、俗世を離れ、新天地の荒野を目指し、旅立とうとする若者の歌になっています。

寮歌の方には、三番の歌詞に続き、

♪ 我が身 容 (い) るるに狭き 国を去らむとすれば  
せめて名残りの花の小枝 (さえだ) 尽きぬ未練の色か

という歌詞があることから、このことは歴然としています。

この点で、負け犬に近い傷心の心を歌う小林旭クンの歌にはこの感じは全くないと言って良いでしょう。

旅順高等学校は、他の旧制高等学校と異なり、関東軍の管理下にあり、自由闊達とはかけ離れた厳しい校則に縛られていたのですが、これに反抗心を抱き、富、名誉といった現世

の欲を目指すのをやめた青年が、新天地を目指して旅立とうとするある種の青年の気負いを感じられます。

下の写真は、旧制旅順高等学校。



旅順高等学校は、1940年という太平洋戦争勃発直前に設立された最後の旧制高等学校で、終戦と同時に廃止されたため、卒業生も少なく、この寮歌が残っただけでも、良しとしなければならぬのかも知れませんが、それでも、単なる流れ者の傷心の歌のように歌い継がれるのは、些か気の毒な気がしてなりませんので、ほんの少しですが、紹介しておきたいと思ったのです。

なお、「アカシアの大連」で知られる清岡卓行氏は、旅順高等学校の卒業生です。

## 10.23 霜降

ウィーンから世界遺産ヴァッハウ渓谷までは 1 時間半ほどで行けることもあって、土曜、日曜の朝のウィーン西駅は、郊外に出かける多くの親子連れやカップルを見かけます。下の写真は、ウィーン西駅。



ご承知の通り、ヨーロッパの鉄道駅は改札がなく（ホームすらないことがあります）、西駅も誰でも駅構内に入ることができます。

天気快晴のウィーン西駅の構内のボックスで、朝ご飯を食べていると、いろんな人達が傍らを通り過ぎていきますが、なぜか、日本の駅を通り過ぎていく人達とは表情が随分違うことに気がきます。

まあ、日本の駅では、改札があって、なかなか通り過ぎていく人の表情を観察することが難しいのですが、日本の大都市の場合、些かせわしない足取りで、他人にぶつからないよう、そそくさと歩く方が多いような気がします。

ところで、新しい西駅構内のボックスでは、構内にある店で買ったものを飲んだり食べたりすることができるのですが、その日は、アップルパイと一緒に絞りたてのオレンジジュースを飲んで、その後、淹れ立ての珈琲を楽しみました。これで 6 ユーロ。



ホテルのバイキングで、余り美味しくないパンとソーセージと玉子とこれまた余り美味しくない珈琲を飲むより、駅の流行っている店で好きなものをいただいて、通り過ぎていく人を眺めていた方がずっと楽しいと私は思います。

絞りたてのオレンジジュースは、オレンジのつぶつぶが感じられて、売店のオバチャンが「うちのは美味しいよ」とニコッと笑ったとおりでした。

さて、食事を終えて、トコトコとホームに入っていきますと、メルク方面に行く列車が既に入線していました。ザンクト・バレンティン行きの列車には自転車を載せることのできる車両があるようで、こういうサービスがあるためか、土曜、日曜は、ヴァッハウ渓谷のドナウに沿った道を風を切ってサイクリングをする沢山の人達を見ることが出来ます。少し走っては、休憩し、持ってきたランチや食べ物を楽しみ、また走っては、道沿いにあるカフェのテラスで、ワインを飲み、秋の陽を浴びて、往復 4、50 km を楽しんでウィーンに帰るのだと思います。

下の写真は、メルク修道院からメルクの街（童話の国の街みたい）の中心広場を眺めたものですが、広場に面したテラスの喫茶店に座っているのは、殆どがサイクリングを楽しんでいる方々です。



ところで、気をつけて見ているわけではないのですが、これまでヨーロッパでは電動自転車を見かけたことはありません。

海外旅行をよくなされている方、見かけたことがお有りでしょうか？

日本では、電動自転車全盛時代？を迎えて、実は、他ならぬ私も、これまでのスポーツタイプの 12 段変速車から、格好だけスポーツタイプの 3 段切り替え電動自転車に買い換えたのですが、オーストリアでは、古いも若きも、なかなか格好いいヘルメットをかぶって、颯爽と田舎道を快走していく姿を見て、少し、恥ずかしいような思いがしました。

ところで、全く話が違いますが、今日 10 月 23 日は、日本では、旧暦 9 月 9 日に当たる「重陽の節句」であると同時に、二四節季の「霜降」。

霜降は、このあと、初霜、秋雨、紅葉と続く、竜田姫の司る季節です。

いよいよ秋も深まっていき、木枯らしが吹き、冬の時雨が降るのももうすぐです。

日本を発つ前、暑い暑いといいながら、半袖シャツで出かけたのに、帰国するときは、長袖シャツにジャケットですから、身体の調子も狂うわけです。

さて、ここで「霜降（そうこう）」を「しもふり」と読んだ方に。

ヨーロッパを旅して感じるのは、正直、やはり、日本の肉は格が違うということでしょうか。

この日、メルクで食べた肉の料理は決してまずくはなかったのですが、日本を出る前に食べた霜降りの松坂肉が不幸のもと。これが頭から離れなくて、もし、この目の前の肉が、松坂肉とはいわないまでも、せめて国産牛だったらなあと、何度思ったか知れません。

本当に日本は豊かさを通り過ぎて贅沢になりすぎたのでしょうか。

私の子どもの頃の小学校の制服は、「霜降り小倉」（知ってます？）でした。まだ、給食に、アメリカの支援物資の脱脂粉乳が出されていた頃のことです。

時が過ぎて、私の黒かった髪も、今では霜降り。

秋山に 霜降り覆ひ 木の葉散り 年は行くとも 我れ忘れめや（万葉 2243 人麻呂）